

カンボジア国境の人々



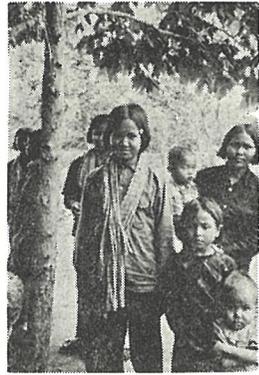
小野修

1 過去

カンボジアには何度も訪れたことがあるが私の行ったところは山や森林の中の難民村ばかりだ。プノンペンにもバタンバンにも行ったことがないし、アンコール・ワットもまだ見ていない。カンボジアの人々を何万と見てきたが、皆難民たちばかりだった。アンコール・ワットを生んだクメールの古代文化はすばらしいということはよく知っているつもりだが、私の会ったクメール人はその文化の恩恵に浴している人々ではなかった。一九六〇年、「安保の年」私はアンコールの古代美術展のため訪日中だったプノンペンの博物館長の通訳をつとめた。そのとき、同館長が挨拶の中で「シアヌーク殿下のご好意により……」と述べた際、私ははじめてこの国の元首の名を知ったのだ。その後ベトナム戦争がたけなわになり、インドシナは世界中の関心の的となった。しかし、ベトナムの影にかかれて、カンボジアはラオス同様、たいていの人々には未知の国だった。

六〇年代の終り、北ベトナムと「解放戦線」側は米軍の支援する南ベトナム軍の攻勢

の前に敗色を強くしたが、国境を接するカンボジア東部に後方基地を設け、ようやく体勢をたてなおした。当時のカンボジア政府の要人の多くは、自国が補給ルートとなったので不正な取引で産をなした。七〇年、シアヌークは政権を追われた。新政権を担ったロン・ヌル一派も五年後、共産革命のために倒された。こうしてポル・ポト政権が登場する。ポル・ポト政権は毛沢東主義を信奉し、ソ連に後押しされていたベトナムの覇権主義的傾向に対抗して独自の国づくりをはじめた。その路線は中国の文革派の指導のもとに行われ、鎖国下のもと、「民主カンプチア」は国全体が一種の強制収容所と化した。旧支配層と知識人は肅清され、貨幣制度は廃止、都市は全面的に放棄され、地方に下放された人民は黒一色の衣服をあてがわれて人民公社に編入され、運河工事や農作業の重労働に服した。多くの人々が生き別れとなり、家庭は崩壊し、党や軍の命令に服さないものは殺されたり投獄された。これが一種の地上の地獄だったことは充分想像しうる。クメール・ルージュ(赤色クメール軍)は本来ゲリラ活動を主眼として勢力を拡大したのだが、数万の



ノム・ブルーにて

兵力で八百万の国民に統制を強いて富国強兵の実を短期間にあげようとすれば苛酷たらざるを得なかった。彼らは自派の理想とする国づくりを毛沢東の教え通り銃剣をつきつけて人民に強いたのであった。

クメール人は羊のようにおとなしい。彼らは古来より恵まれた土地と湖(トンレ・サップ)から、ほとんど勞せずして生活の糧を得てきていたので、およそ戦って勝ち取る姿勢などなかったのだ。共産主義社会の夢は指導層に平野の羊群を牧するような錯覚を与えたのかもしれない。人々はときには雑草のように根こそぎにされ、陽に灼かれた。一九七八年、私はアメリカの中西部の町で、TVのスクリーンに映しだされたカンボジア国内の様子を見た。奇怪なことに、このユーゴT

V班の記録には女性と子供しか登場せず、運河工事に従事する女性群や身にあわぬ大きな機械に必死で取り組む少年のおびえた表情が印象に残った。おそらく世界中が、この国内部で進行しつつあった不気味な政治社会情況に注目していた筈である。中国経由でカンボジアを訪れたわが国の国会議員は新聞社から簡易カメラを押しつけられ、見たものすべてを何でも撮影してくるよう依頼されたものだった。その写真にはアンコール・ワットがほとんど無傷で残っている様子や人通りのないプノンペンなどの町などが映っていた。誰かが何とかしなくてはならないといった焦立たしい気持は、カンボジア国内から洩れてくる民衆の苦渋の声によって倍加されるのだった。そして、その翌年、ベトナム軍は年の暮、米の収穫が終わったばかりのカンボジアを侵略征覇した。百万を越える難民がタイに向ってあふれボル・ポト政権は西部に逃亡し、タイ国境付近の密林に陣をかまえ、ベトナム軍のたびたびの攻撃をかわして今日に至っている。

2 現在

タイ・カンボジア国境は延長約六百キロだが、百万の難民があふれ出したのは主として西部国境の二百キロの地域である。カボチャを縦に切ったとして、種のある部分がトンレサップ湖、尻のくぼみがプノンペンとすれば、へたのあたりが難民救援の根拠地となったタイ国境の国境の町アランヤプラテートである。アランヤプラテートは一昨年までは救援団体でごった返したが今日では徐々に平静になりつつある。一昨年、はじめて訪れたときは砲撃の音に胆を冷やした。この町から五〇キロ半径で円を描けば難民の大半が入る。タイ国側の難民收容所の收容人数は激減している。今年度中にほとんどが收容者をカンボジア側に送還して閉鎖する方向に向いつつある。そうなれば、カンボジア国内へ帰還した(といってもタイ国境付近にへばりついていて)難民救済の問題がますます重要になってくるだろう。

筆者はKRERP(カンボジア難民救援会)の救援活動を手伝って度々カンボジア国内に入った。難民はちょうど敗戦直後の日本の焼け跡に立ったバラックのような仮小屋に住んでいて、生活のあらゆる便宜を失った暮しを



訓練中のクメール・ルージュ兵

している。小屋のまわりが緑の樹木に覆われているだけに、自然の豊かさの中で強いられる彼らの苦難が不思議に思われる。しかし、飲料水、食糧、医薬品、衣料、建材、工作道具、農機具、文房具、食器、その他、私たちが日常手にするあらゆるものがない上に、猛威をふるうマラリア蚊にせめ立てられていることを察知すれば、この生活が大自然に囲まれた楽園から程遠いところだということがわかってくる。

昨年夏、豪雨の中を私たちは国境の南の果てのカルダモン山脈中の難民村を訪れた。私たちは午後一時に山のふもとを村を出発し、密林の中の林道を二〇数キロ歩き通し夜八時に難民村に到着した。集中豪雨の中、懐中電灯の光をたよりに暗闇の山道を行くのは難行というべきだろう。蛇もサソリもいるし、ヒルもいる。到着した村はソン・サン派（民族統一戦線派）に属し、人口約五〇〇の村が三つ、平家の落人の部落のようにけわしい山間部にはりついたようにひろがる。年間降雨量六千という大台ヶ原山なみに雨の多い地域で、山林を切りひらいてつくった傾斜地の農地には場所によっては山頂部まで水稲（陸稲でなく）が植えられている。私たちはここにキニーネ一万錠を運び、二日泊ったが雨はやまなかった。今、この村の人々が一番に欲しがっているのは頑丈な日本製の大型トラックで、それがあれば二〇数キロの山道を物資を肩や頭上にかついで往復せずにすむというのである。この往復のたびに過労から死者が出るのは珍らしくないという。この村からの帰り、前夜の豪雨で密林の中の河川はどこも増水していた。私たちは腰までつかって、

お互いに手をつなぎ合って流されないように用心しつづ渡った。タイ人のポランティアのP君は流れに足をとられたが、岸辺から垂れていた藤蔓を歯でくわえて必死で体を支えたので命拾いした。

救援活動には冒険心が必要だが、文明社会ではすでに失われてしまっている原始的で単純な生活の喜びを教えられることも多い。

中国製の銃やロケット砲をかついだ兵士たちと中国製のトラックに乗り込み、最近まで虎が出たという林道を走るとき、三〇メートルはあるムクノキの影をオオムラサキが二匹ゆっくりと夢のように舞っていたりする。そのあと象の背に乗り換えて、湿地を抜け、バナナの木がどこまでも緑の海のように茂っているあたりを象の頭や体でバナナの葉を押し分けて進むとき、ポランティアたちの日々の労苦も解放感からの強い喜びに転じていく。

（大学文学部教授）